

論文審査の要旨

報告番号	保研 第 26 号		氏名	前田則子
審査委員	主査	中尾 優子		
	副査	築瀬 誠	副査	牧迫 飛雄馬
	副査	西尾 育子	副査	山下 亜矢子

Development of a self-assessment behavioral and psychological symptoms of dementia competency scale for care teams at long-term geriatric care facilities

高齢者福祉施設におけるBPSDチームケア自己評価尺度の開発

BPSD（認知症の行動的および心理的症状）を理解することは、高齢者福祉施設の介護職にとって重要である。BPSDの知識を身につけることや対応のスキル向上は、対象者により質の高いケアを保証することができる。今までの研究は、個々の専門家のスキル向上に焦点をあてて行われてきた。

本研究者前田則子氏は、認知症に対する効果的なチームケアの戦略がまだ解明されていないことに着眼し、BPSDを認識する能力およびチームケアを評価する自己評価尺度の開発を目的として、研究を行った。

最初に29名を対象にフォーカスグループインタビューを実施し、チームワーク要素モデルの6概念に一致する項目を抽出し、サブカテゴリを基盤に55項目を作成し、5段階リカート法による尺度開発を行った。この尺度に対し、43の高齢者福祉施設で430名を対象に無記名自記式質問紙調査を実施した。310人の参加者からのデータを分析した。

この尺度の信頼性と妥当性の検討は、クロンバックのアルファ係数、再テスト法、探索的因子分析、確認的因子分析、基準関連妥当性、および構成概念妥当性を実施した。因子分析は、すべてのスケール項目で正の相関を示し（ $r_s=0.43\sim0.73$ ）、1つを除くすべての項目の α 係数は0.70以上であり、十分な信頼性を示した。再テスト法において有意な相関が得られた（ $r_s=0.48\sim0.76$ ）。確認的因子分析では、すべての指標で適合は良好であった。基準関連妥当性（ $r_s=0.43\sim0.73$ ）と構成概念妥当性（ $r_s=0.13\sim0.52$ ）は、正の相関関係を示した。

BPSDチームケア自己評価尺度の信頼性及び妥当性が確認された。

審査の結果、5名の審査委員は、本論文は前田則子氏の研究の積み上げにより導き出されたもので、チームケアの視点からの評価尺度に着目したことは、独自性があり、この結果は保健学の発展に寄与するものであると評価した。今後、この尺度を洗練し、活用することで、臨地の課題を克服するのに役立つことが多いに期待できる。このことから、この論文は、博士（保健学）の学位論文としての価値を十分に有すると判定した。